

第四章 日露交渉

第一節 大連、長春、東京會議

大正九年七月薩哈連州軍事占領後北樺太油田、炭田ニ關スル事項處理ノ經過ニ付テハ既ニ第三章ニ記述セル處ノ如シ此間西比利亞方面ノ政情ニ關シテハ我軍カ右薩哈連州軍事占領ノ聲明ニ基キ後貝加爾方面ヨリ撤退スルヤ白系セミヨノフ軍ノ没落トナリウエルフネ政權（大正九年三月ウエルフネウージンスクニ出現セル後貝加爾地方臨時政府ニシテ歐露勞農政府ノ分身ト認ムヘキモノナリ）ノチタ侵入ヲ誘致シ十一月同政權ヲ主体トスル極東共和國成立シ次テチタニ於テ地方政權代表等ニ依リ極東統一會議ヲ開催シチタニ極東共和國中央政府樹立セラレ翌大正十年二月憲法制定シテ自由民主非共產制ヲ採用シ我國ト勞農露國トノ一ツノ緩衝國ヲ出現スルノ形勢トナレリ而シテ勞農政府ハ同共和國ノ樹立ニ依リ之ヲシテ東洋方面トノ通商關係ヲ開始セシメ以テ自國ノ窮迫セル經濟狀態ヲ回復シ且ツ日本ノ駐兵ノ口實ヲ除去セントスルノ底意アリ

チタニ極東
共和國成立
（大正九年
十一月）

極東共和國ハ屢我ニ對シ親善及通商關係開始ノ希望ヲ表明セリ

極東共和國
トノ間ニ大
連會議開催
(大正)
十年八月

一面列國ハ漸次勞農露西亞又ハ極東共和國ト經濟關係ヲ設立スルノ態度ニ出テツツアリ而シテ我西比利亞駐兵ハ從來各種ノ誤解ヲ招キ之カ爲露人其他外人ノ排日宣傳ニ利用セラレ殊ニ米國ノ如キハ從來機會アル毎ニ我駐兵ヲ悅ハザルノ意志ヲ表明セリ其他内外ノ事情ニ顧ミ帝國政府ハ此際速ニ極東共和國ト通商問題商議ノ形ニ於テ非公式交渉ヲ開始シ以テ西比利亞方面ニ於ケル帝國臣民ノ經濟的發展ノ地盤ヲ作り帝國ノ利益ヲ計ルヲ緊要ト認ムルニ至レリ然ルニチタ政府ハ外務次官ゴセニコフヲ極東ニ派シ頻ニ我方トノ交渉ヲ切望シ居ルニ願ミ大正十年七月十二日閣議及外交調査會ニ於テ於テ交渉開始ニ關スル我方針ヲ決定シ翌八月二十六日大連ニ於テ右チタ政府ヲ相手トシ所謂大連會議ノ開催ヲ見ルニ至レリ

本會議ニ於テ我方ハ浦鹽派遣軍政務部長松島肇ヲ先方ハチタ共和國外務大臣ユーリンヲ各代表トシテ交渉ヲ開始セシカ後同國保健大臣ヘトロフ來リユーリント交代シ九月六日チタ側ノ協約安ナルモノヲ提出セリ 本安ニ於テハ日露兩國ノ親善、兩國ノ主權尊重、內政不干渉、入國旅行、居住、職業、通商航海、宗教、政治的意見等ノ自由、居留民ノ生命財產ノ安全、關稅、裁判、納稅、通信等一般の條項竝ニ日露漁業條約ヲ改訂スヘキコトヲ含ミ且

極東共和國政府ハ門戶開放主義ヲ認メ兩締約國ノ爲有利ナルヘキコトヲ原則トシ法令ニ依リ日本企業家ニコンセツシヨシノ提供上十分ナル援助ヲ與フヘキコト 日本帝國政府ハ速ニ極東共和國領域ヨリ自國軍隊ノ撤退ニ着手スルコト 外交關係ヲ速ニ樹立スル措置ヲナスコト等ヲ提示セリ

帝國代表ハ政府ノ訓令ニ基キ同月二十六日右ニ對スル我對安ヲ提示シ且(一)極東共和國政府ハ其ノ沿岸ノ要塞ヲ撤廢シ帝國ヲ脅威スルカ如キ軍事の措置ヲナササルコト竝ニ日本武官ノ駐在ヲ承認スルコト (二)日露漁業協約ヲ改訂スルコト (三)尼港事件ハ今次ノ交渉ヨリ除外スルコトニ付テモ我ヨリ文書案ヲ提示シ又沿海州撤兵ニ關シテハ通商其他ニ關スル協約成立セバ帝國ハ累次ノ聲明ニ係ル國境ニ對スル脅威ト居留及交通ノ安全ニ對スル不安除去セラレヘキニ依リ自主的ニ撤兵スベキコトヲ聲明セリ 而シテ前記我對案ハ通商ニ關スル一般的基本條項ノ外、宣傳禁止、極東共和國領域ニ於ケル非共產制ノ維持、浦鹽ヲ純然タル商港トナスコト 舊條約ノ尊重、兩國ノ既得權ノ尊重、黑流江及松花江ニ於ケル航行權ニ關スルコトヲ含ミ尙

極東共和國政府ハ門戶開放主義ヲ認メ日本帝國臣民ニ對シ其ノ領域内ニ於テ鑛業、林業、農業、其他ノ産業並商業ニ關シ從來外國人ニ加ヘラレタル制限ヲ撤廢シ將來ニ於テセ之ヲ加フ

ルコトナカルヘク又土地ノ所有權、永租借權ヲ許與シ且沿岸貿易ノ自由ヲ承認スベキコトヲ要求セルモノナリ

要スルニ我ハ先ヅ之等基本的ノ協定ヲ了シ次デ軍事協定ヲナシ然ル後別ニ尼港事件ノ解決ヲ協定セントスル方針ヲ以テ折衝ヲ進メタリシガ其後先方ノ態度硬化シ極東共和國領域内ヨリ全部ノ撤兵、尼港事件ヲ此際解決スルコト、勞農政府代表ノ會議參加等ヲ要望シ論議徒ニ遷延セリ(註)チタ政府ノ態度ニ關シ大正十年十一月「我松島代表チタ側ノ態度強硬トナリタルハ政府部内ニ於ケル硬派勝利ヲ制シタルト又米國領事等ノ言動ニ依リ恰モ進行中華府會議ニ望ヲ屬スルニ至リタルコト及日本ハ近ク撤兵ザルベカラザコトヲ豫算編成ノ成行ニ依リ確メ得タルコト等ニ基因スルモノト思考ス」ル旨ヲ外務大臣ニ報告セリ其後大正十一年二月ベトロフ代表ハサカレン州撤兵問題ニ關シ華府ニ於ケル我弊原全權聲明ノ一部ヲ自己主張ノ説明ニ引用セリ

尼港事件ニ關シテハ爾後先方ヨリ屢意見ヲ表示セシガ大正十一年二月ノ會議ニ於テベトロフハ北樺太ニ於ケル各種コンセンションヲ普通ヨリモ有利ナル條件ニテ日本人ニノミ(外國人ハ勿論露國人モ之ヲ除外ス)許與スルコトトシ此ノ際撤兵ノ件及尼港事件ヲ同時ニ解決シタキ旨ヲ

述べタリ而モ先方ハ曩ニ尼港事件ノ責任ヲ共和國ニ於テ負フベキニアラズト述べ其他交渉上馳引頗ル多ク其ノ解決決シテ容易ナラズト認メラレタルニ由リ三月二十日内田外務大臣ハ松島代表ヘノ訓令ニ於テ「尼港事件ハ極テ重大事項ニ屬シ其ノ解決方法ハ内外ノ關係ヨリ種々考究ヲ要スルモノアリ先方ニ於テモ實行的解決方法ニ付考慮ヲ要スル處アルベク從テ短日子ノ間ニ具體的解決ニ到達スルコト不可能ト認メラルルニ依リ先ヅ基本協約ノ成立シタル場合引續本件ニ關スル交渉ニ入ルコトハ同意スルモ差當リ基本協約ヨリ切り離スノ外ナシ」トセリ而シテ基本協約ニ關シ我方ハ速ニ之ヲ解決シ日露間ノ事態ヲ安定スルタメ出來ル丈ケ寛大ノ態度ヲ以テ逐條審議ヲ進メ漸次意見ノ一致ヲ見ツツアリシガ右尼港事件及チタ軍ノ浦鹽進出黑龍江、松花江航行權等其ノ他二三ノ點ニ付テハ四月ニ入ルモ交渉甚容易ナラズ先方ハ際限ナク煩鎖ノ問題ヲ提議シテ論議多岐ニ涉リ又我撤兵期限ノ保證ヲ求ムル等益其ノ誠意ヲ疑ハシムルモノアリ

是ニ於テ大正十一年四月閣議及外交調査會ニ於テ帝國最後ノ方針ヲ決シ我ガ代表ハ此旨ヲ體シテ極力折衝セルモ議ナラズ遂ニ大正十一年四月十六日會議決裂スルニ至レリ右閣議決定左ノ如ク以テ本會議ノ決裂ノ事情知ルベシ

大連ニ於ケル我代表者トチタ政府代表者トノ交渉ハ開始以來既ニ七ヶ月ヲ經過セルニ拘ラズ未ダ解決ニ至ラズ右ハ彼我意見ノ異ルニ基クハ勿論ナルガ又華府會議ヲ始メ露西亞ニ對スル歐米諸國ノ態度其ノ他各般ノ事情ニ基キチタ側ニ於テ種々驅引ヲ爲スニ依ルモノト思考セラルル處本交渉ハ成ルベク速ニ之ヲ解決スル必要アリ特ニ最近浦鹽派軍第十一師團ト第八師團ノ交代期ニ迫リ居ルヲ以テ諸般ノ事情ニ顧ミ此際一氣呵成ニ基本協定ノミニテモ調印ヲ濟マセタル上右交代ヲ實行スルコトナク直ニ第十一師團ヲ歸還セシメ守備區域ヲ縮少シ一面本交渉ノ促進ヲ計ルト共ニ他面我方ニテハ撤兵ノ誠意アルコトヲ示サントシ松島政務部長ニ電訓ヲ發シテ右方針ニ依リ談判セシメ本月中旬迄ニ調印ノ運ニ至ラザルニ於テハ談判ヲ打切ルノ止ムナキニ至ルベキ旨警告セシメタリ目下ノ處基本協定ニ付テハ我方ニ於テ出來得ルル限リ寛大ノ態度ヲ示シタル結果双方意見一致ニ傾キタルモ尙先方ハ尼港事件解決及齊多軍ノ浦鹽進出ヲ要求シ黑龍江松花兩江航行權ニ付テハ我要求ヲ拒絕シ其他二三ノ點ニ付未ダ意見一致セズ今後齊多側ニシテ我方提示ノ期間内ニ我主張ヲ承諾セバ可ナルモ萬一到底之ヲ承諾スル見込ナキ場合ニ於テハ左記案ニ依リ措置スルコト可然

一、豫定ノ如ク第十一師團ト第八師團トノ交代ヲ實行スルコト或ハ談判纏ラザルニ拘ラズ此際第八師團ヲ派遣スルコトナクシテ第十一師團ヲ歸還セシメ守備區域ヲ尼市方面迄縮少スルモ一策ナリ雖斯クノ如クスルトキハ齊多側ハ日本ノ要求ヲ拒絕スルタメ却テ自己ニ有利ノ形勢ヲ生ズル結果トナルヲ以テ益々我ニ對シ輕侮ノ念ヲ起シ今後ノ交渉ニ於テ我ニ不利ナル形勢ヲ馴致スバキノミナラズ政情安定ヲ期シテ撤兵セントスル帝國政府ノ方針ニ反スル結果ヲ齎スベキニ付寧ロ此際交代ヲ斷行シテ暫ク形勢ヲ觀望スルヲ可トス

二、大連ニ於ケル談判ヲ打切リ我代表者ニ引揚ヲ命ズルコト

既ニ我方ニ於テハ齊多側ト談判ニ於テ漸次寛大ノ方針ヲ取り最近ニ於テハ寧ロ齊多側ニ有利ナル形勢ヲ齒ラス如キ程度ニ於テ話ヲ進メ來リタルニ依リ若シ齊多側ニシテ誠意談判ヲ纏ムル意志アラバ右程度ニ於テ折合フコト得策ナルニ拘ラズ頑強ニ我要求ヲ應諾セザルニ於テハ彼等ハセノア會議等ニ重ヲ置キ故意ニ談判ヲ遷延セシムルモノト思考セラルルニ付此際斷然交渉ヲ打切ルコト可然

三、形勢ノ推移ヲ待テ好機ヲ見テ可成速カニ撤兵ヲ決行スルコト前記ノ如キ方針ヲ取り我方ニ於テハ暫ク現狀ヲ維持シテ形勢ノ推移ヲ待ツコトトスルモ將來永ク駐兵ヲ繼續スルハ面白

カラザルヲ以テ該地方政情ノ安定ニ努メ好機ニ於テ可成速カニ撤兵ヲ決行スルコト
要スルニ露國人ノ性癖トシテ談判ニ駈引多キヲ以テ這同ノ交渉ニ於テモ此點ヲ考慮スル必要アリ
曩ニ英露ノ通商條約交渉ニ際シテモ數回談判ノ中止ヲ見タリ此際我方ニ於テ前記ノ如ク毅然
タル態度ヲ示スハ將來ノ爲メ得策ト思考ス

(終)

(註) 大連會議ニ於ケル我國ノ最終提案ニ於テハ通商ニ關スル事項ノ外特ニ尼港事件ニ關シ共
和國ガ同事件ニ關シ全責任ヲ以テ解決スベキコトヲ外交文書ヲ以テ聲明シ日本政府ハ通
商協約及附屬文書ノ調印後直ニ尼港事件交渉ニ入ルコト又本件ニ付日本帝國政府ハ極東
共和國ノ主權又ハ領土ヲ侵害スルノ意志ナク同事件解決後速ニサカレン州ヨリ撤兵スベ
キ旨ノ聲明ヲナスコト等ヲ含メリ

大連會議決裂ノ前後我國ノ政局ハ曩ニ(大正十年十二月)原首相(敬)斃レ高橋(是清)内閣
ヲ經テ大正十一年六月加藤(友三郎)内閣ノ成立ヲ見タルガ此間別章ニ記述スルガ如ク華府會
議ニ於テ我サカレン州駐兵問題ニ關シ討議セラルルアリ其他第三國人ノ北樺太利權運動モアリ

サカレン州
内占領地域
ヲ縮少シ樺
太對岸ヨリ
撤兵ヲ聲明
ス

(大正十一年
七月)

内外ノ情勢最早豫テノ問題タル西比利亞撤兵ヲ遷延シガタキニ鑑ミ六月二十三日廟議ハ北樺太
ヲ尼港事件解決ノタメ保障占領ニ殘シテ他ハ自主的撤兵ヲ斷行スルニ決シ大正十一年七月十一
日左記ノ聲明ヲ發セリ

帝國政府ハサカレン州内占領地域ヲ縮少スルヲ適當ト認メ九月迄ニ樺太對岸ヨリ全部撤兵ス
ルコトニ決セリ北樺太ノ占領ハ尼港虐殺事件ノ解決ヲ待テ之ヲ解除スベシ

斯テ我派遣軍ハ同年八月下旬ヨリ十月下旬マデニ逐次沿海州ヲ撤退シ大正七年八月西比利亞出
兵以來時局幾多ノ變遷ヲ經テ今々全ク同大陸ヨリノ撤兵ヲ完了スルニ至レリ尙當分浦鹽ニ殘置
セラレタル軍艦日進モ翌大正十二年四月ヲ以テ引揚ゲタリ

之ヨリ先チテ政府ハ大連會議ノ再回ヲ提議シ來リシガ我國ハ前記ノ如ク自主的撤兵ヲ聲明スル
一方同政府ト充分ノ豫備交渉ヲナシ先ヅ前回ノ大連會議ニテ既ニ審議セル基本條項ヲ基礎トシ
テ協議ヲ進ムベシトノ諒解ノ下ニ其ノ提議ニ應ズルコトトセリ

而シテ海軍ハ本會議ト關聯シ海軍トシテノ要求等ニ關シ豫メ研究スル處アリ大正十一年八月海
軍大臣ノ決裁ヲ經タリ(八月九日官房機密第一一六七號)右研究事項中北樺太油田、炭田ニ關
スルモノ次ノ如シ

一、尼港問題解決ニ當リ海軍側ノ希望條件竝ニ其ノ最小限度如何

海軍ノ希望條件ハ左ノ二件ニシテ何レモサカレン州保障占領ノ真隨ニ觸ルルモノナルヲ以テ管ニ海軍側ノ希望ナルノミナラズ帝國臣民全般ノ意嚮亦此處ニ存スルモノト認メラル從テ左記ノ二條件ハ尼港問題解決上海軍側ノ絶對希望條件ナルト同時ニ又實ニ最小限度ノ要求ニ屬スルモノナリ

(一) 北樺太ニ於ケル油田炭田ニ關スル鑛業權ノ獲得

(二) 下部黑龍江航行權ノ獲得

而シテ(一)ノ獲得方法ガ租借、讓與、買收等何レノ形式ニ依ルベキヤハ外務省ノ所信ニ委スベキモノニシテ敢テ海軍ノ容喙スベキ處ニ非ズト雖モ既往ノ方針ニ從ヒ之ガ目的達成ニ關シ海軍ハ極力支援スルヲ要ス

樺北太ニ投ジタル海軍(北辰會)ノ資金概算

海軍	約四、〇〇〇、〇〇〇圓
北辰會	約一、六六〇、〇〇〇圓
計	約五、六六〇、〇〇〇圓

(註) 尙北樺太油田、炭田ノ評價ニ關シ當時外務省當局ヨリノ問合セニ對シ次ノ通回答セリ

(一) 北樺太ニ於ケル全油田、炭田ノ見積價格

油田	公有	五千二百五十萬圓
	私有(先願地)	九千七百五十萬圓
炭田	公有	一億五千萬圓
	私有	一億圓
		二億五千萬圓

(二) 我希望スル主要ナル油田、炭田見積價格

油田	公有、私有全部	一億五千萬圓
炭田	公有	一億五千萬圓
	私有(スタヘーフ)	五千萬圓

北樺太炭田ニ對シ海軍トシテ將來特ニ希望ナキヤ

海軍提案ニ基キ發布手續進捗中ナル鑛業取締令發布ト共ニ封鎖炭田ヲ開放スル以外海軍トシテ特ニ希望ナシ尙將來ニ於ケル出炭ノ利用其ノ他管制等ニ關シ目下何等希望ヲ有セズ經營者ノ自然發展ニ委セントス

三、北樺太作業地ニ建設シアル無線電信ハ將來如何ニ處置スルヤ

現有無線電信所ハオハ(三吉)チャイオ(六吉)ノ二個所ニシテ器具ハ海軍ノモノヲ無償貸與セルモ之ガ建設、使用、管理ハ舉テ北辰會ニ一任シアリ將來ト雖モ油田地ノ交通不便ナルニ鑑ミ油田開發及稼業上無線電信所ノ使用繼續ヲ必要トスルハ勿論ナルモ必ズシモ之ヲ北辰會ノ掌裡ニ置カザルベカラザル理由ナキノミナラズ之ガ主張ハ却テルスキ一島無線電信所問題等他ニ影響スル處アルヲ以テ相當條件ノ下ニ露國側ニ讓渡スルヲ可トス

長春會議開
催

(大正十一
年九月)

斯クテ會議ハ大正十一年九月四日長春ニ於テ開催セラレシガ我方ハ松平外務省歐米局長(恒雄)及松島總領事等先方ハア、ア、ヨツフエ及ビヤ、デ、ヤンソン以下出席セリ 尙海軍ハ池中海軍中佐(健一)ヲ帝國委員顧問トシテ派遣シ前記海軍研究事項ノ趣旨ヲ体シ服務セシメタリ然ルニ會議開會後先方ハ大連會議及今回ノ豫備交渉ヲ無視シ基本協定ノ效力、其ノ適用範圍等ニ關シ之ヲ勞農露國ニモ及ボサントスル等異論ヲ主張スルノミナラズ我北樺太ノ駐兵ガ尼港事件ニ對スル保障占領ナルコトヲ知ラザリシト稱シ同事件ノ解決ニ先チ北樺太撤兵期日ノ明示ヲ要求スル等全ク其誠意ヲ認メガタク遂ニ開會以來僅ニ三週九月二十五日再度決裂スルニ至レリ

長春會議決
裂

(大正十一
年九月)

而シテ右決裂ニ關シテハ同月二十三日閣議ヲ經テ内田外務大臣ヨリ松平代表へ訓電セル處ニ依リ其ノ事情ノ大体ヲ知ルヲ得ベシ即左ノ如シ

内田外務大臣ヨリ松平代表宛訓電(大正十一年九月二十三日)

今日迄ノ經過ニ徴スルニ露國側ハ協定案各條ノ内容ニ付テハ姑ク措キ基本協定ノ適用範圍及效力發生時期ニ關シ我主張ニ明白ナル同意ヲ與ヘザルノミナラズ却テ先ヅ北樺太撤兵問題ヲ提起スル意圖ヲ有スルモノノ如クナル處基本協定ノ適用範圍ヲ帝國ト極東共和國間ノ關係ニ限リ調印ト共ニ即時其效力ヲ發生セシメ爾餘ノ諸問題ニ關スル交渉ハ之ヲ基本協定成立後ニ讓ルコトハ我方ノ確定方針ニシテ右ハ既ニ大連會議ニ於テ彼我意見ノ一致ヲ見タル所ナルノミナラズ過般ノ豫備交渉ニ於テモ其ノ趣旨既ニ明ニシテ帝國政府ニ於テハ此際其一部ト雖モ讓歩ノ餘地ナキニ付貴官ノ努力ニモ拘ラズ露國側ニ於テ尙我主張ヲ拒絕スルカ又ハ言ヲ左右ニ托シテ不當ニ會議ヲ遷延セシメ大体本月末頃迄ニ明答ヲ與ヘザル場合ニ於テハ貴官ハ會議ヲ打チ切り引揚差支ナシ

但シ先方ニ於テハ基本協定ノ效力發生時期ト北樺太撤兵時期トヲ關聯セシメ以テ會議決裂ノ

原因ヲ我北樺太駐兵問題ニ歸セント努ムベシト思考セラルルヲ以テ申ス迄モナキコトナガラ
 此點ニ付特ニ細心ノ注意ヲ拂ハレ北樺太ニ關係アル問題ニ就テハ我方ニ於テ基本協定成立後
 交渉ヲ開始スルニ何等異存ナク然モ此點モ亦大連會議ニ於テ彼我意見ノ一致ヲ見タル處ナル
 ノミナラズ豫備交渉ニ徴スルモ其ノ趣旨明白ナル所以ヲ説示セラルルト共ニ我方ニテハ先方
 ノ希望ニ願ミ基本條約締結後引續キ勞農政政府トノ間ニ通商協定ニ關スル交渉ニ入ルニ同意
 シ且非宣傳、非敵對ニ關シテモ同政府トノ間ニ文書ヲ以テ取極ヲナスニ異存ナキコトトシ百
 方和衷的態度ヲ示シタルニ拘ラズ露西亞側ハ極テ誠意ヲ缺キ不當ニ從來ノ行態ヲ無視シ這般
 豫備交渉ニ依ル諒解ヲ覆サントスルモノナルコトヲ指摘セラレ會議破裂ノ場合ハ其責任全ク
 彼ニアルコトヲ闡明セラレタシ

(終)

ヨツフエ來
 朝東京ニ於
 ケル會談
 (大正十二
 年六七月)

超テ大正十二年一月ヨツフエハ後藤子爵(新平)ノ斡旋モアリテ來朝滯在中此機會ニ川上公使
 (俊彦)ト同人トノ間ニ豫備的會談ヲナスコトトナリ同年六月下旬ヨリ七月末ニ至ル迄東京ニ
 於テ數次意見ノ交換ヲ行ヒシガ之亦何等纏マル處ナク同人ハ八月退去セリ

此川上ヨツフエ會談議事要錄(日本側作成)中北樺太油田、炭田ニ關スル應答ノ狀況左ノ如シ

大正十二年六、七月東京ニ於ケル川上ヨツフエ會談議事要錄中

(日本側作成)サカレン問題ニ關スル項

日本側提議

露國ハ相當價格ヲ以テ露領サカレンヲ日本ニ賣却スルコトニ同意ス日本ハ一億五千萬圓内外
 ヲ以テ相當價格ト認ム

日本代表ハサカレンノ如キ一島ヲ二國ニテ領有スルコトハ將來種々ノ紛争ヲ惹起スル虞アル
 ヲ以テ此際露西亞ニ於テ相當價格ヲ以テ其ノ領土タル北サカレンヲ日本ニ讓渡セラレンコト
 ヲ希望シ且日本學者専門家ノ調査ニヨレバ同島ノ經濟價值斯ク大ナラザルノミナラズ同等ノ
 富源ヲ開發スルニハ多額ノ投資必要ナルニ付買收價格ハ一億五千萬圓内外ヲ以テ相當ト認ム
 ル旨聲明セリ

日本代表ハ露國ヨリ北サカレンヲ買收シタル場合日本ハサカレン島ノ無防備並韃靼海峽及宗
 谷海峽ノ自航由行ニ關シボーツマス條約第九條第二項ノ趣旨ニ準ジ約スルニ異議ナカルベキ
 旨並露國ハサカレン對岸ノ自國領土ニ堡壘等ヲ築造セザルコトヲ約スルコト必要ナル旨附言

露西亞側回答

露國代表ハ露領サカレンヲ日本ニ賣却スル事夫レ自体ハ露國ニ於テ應諾シ得ルモノト思惟スルコト但シ國民ヲ納得セシムルタメニハ其價格ノ大ナルコトヲ要スル旨ヲ述ベ最初經濟上、政治上、軍事戰略上ノ考量ニ基キ拾億金留以下ナルコトヲ得ザルベシト聲明シタルガ後拾五億金留以下ナルコトヲ得ザル旨仄セリ
本問題ハ未決ノ儘留保セラレタリ

日本側提議

北サカレンノ賣買成立セザル場合露國ハ日本政府又ハ日本會社ニ對シ北サカレンニ於ケル石油、石炭、森林ニ關スル富源開發ノ長期利權ヲ許與スルコトニ同意ス
日本代表ハ北サカレンノ利權ハ單ニ同島ノ一定地域ニ於ケル一定富源ノ開發ニ關スル經濟的利權ニシテ露國ガ曾テ旅順大連ヲ租借シタル時ノ如ク全島ヲ租借セントスル政治的利權ニア

ラザルコトヲ指摘シ築港及鐵道布設等利權ニ關聯スル施設權ヲ必要トスルコトヲ述ベ露國側ノ提議セル露國政府ノ利權參加ガ利權收益ノ一定歩合(例ヘバ純益ノ五分乃至六分)ヲ同政府ニ支拂フ意味ナルニ於テハ之ニ異議ナカルベキコトヲ聲明セリ尙利權ノ期限ハ九十九ヶ年少クトモ五十五ヶ年ヲ希望セリ

露西亞側回答

露國代表ハ本提議ヲ以テ根本ニ於テ應諾シ得ベキモノト思考スルモ利權ニ關シ知ル所少キ故ヲ以テ日本代表ノ陳述ヲ基礎トシ「日本ハ北サカレンニ於ケル石油、石炭、森林ノ富源開發ニ關スル長期(五十五ヶ年乃至九十九ヶ年)利權ヲ希望スルコト 右利權ハ第一ニ日本政府第二ニ日本當該會社名義トスルコト 露國勞働法其他ノ法令ヲ尊重スルノ問題ハ日本側ニ於テ之等法令ヲ承知セザルニ付留保スルコト」ヲ本國政府ニ電報シ其意向ヲ確ムベキコトヲ約セリ
同代表ノ言ニ依レバ右電報ハ即時(七月九日)モスコウニ發送セラレ一週間目ニ回答アルベキ筈ノ處最近會議迄同代表ハ何等之レニ關スル報道ヲナシ得ザリキ露國代表ハ七月三十一日ノ會議ニ於ケル日本代表ノ質問ニ對シ右諸條件ハ利權ニヨリ程度ヲ異ニスベキモ日本ニ與フベキ總

テノ利權ニ取り應諾シ得ルモノト思考スル旨聲明セリ北サカレンノ利權問題ニ關シ意見ノ交換ヲ行ヒタル際同島ニ於ケルシンクレア契約ニ言及シ露國代表ハ最初右契約ハ今後若干年限内ハ之ヲ破棄スルコトヲ得ルモ破約料ヲ支拂フ要アリト述べ後本國政府ヨリノ報道ニ基キ破約料ノ規定ナキコトヲ聲明セリ

尤モ運動費及其他ノ費途ニ對スル損害ヲ支拂フ必要ヲ生ズベケレドモ其價額ハ極テ些少ナルベシト附言セリ

(終)

第四章 日露交渉

第二節 北京會議中北權太利權ニ關スル交渉ノ一般經過

前記ノ如ク大正十年以來ノ日露交渉ハ先方ニ誠意ヲ缺キ毎回得ル處ナクシテ止ミタリシガ此間第七章ニ記述スルガ如ク英國系會社ノ舊權利主張華府會議ニ於ケル日米間ノ討議及シンクレア、スタンダード等米國石油會社ノ運動ノ如キ大ニ警戒ヲ要スルモノアリ當時(大正十二年)我海軍ニ於テモ之等四圍ノ狀勢ニ鑑ミ對露問題ノ解決ニ關シ徒ニ日ヲ曠フスルニ於テハ第三國ノ干渉等ニ由リ事態愈紛糾シ樺太駐兵モ彼ノ山東問題ノ如ク何ノ得ル處ナク撤兵斷行ノ餘儀ナキニ至ルベキ憂フ宜シク速ニ對露方針ノ大綱ヲ定メ大局上襟度ヲ示シテ日露紛糾ノ解決ニ努ムルヲ賢明ナリトスル意見アリ

而シテ露國側ニ於テモ豫テ我國トノ國交恢復ヲ希望シ大正十二年九月關東大震災ノコトアルヤ露國ハ我罹災民ノ救濟ヲ申出デ交渉關係開始ノ端緒トセントスルモノノ如ク又北京ニ於テハカラハンヨリ我芳澤公使ニ對シ正式交渉開始ノ希望ヲ告ゲ來レリ而シテ同年十一月末露國ハ浦鹽ニ於テ我領事ノ通信權ヲ制限シ更ニ翌大正十三年二月ニハ公式ニ我領事ノ否認郵便物交換停止

北京會議前
ニ於ケル彼
我ノ情勢

ヲ敢テシ同月二十六日ニハ突如軍事秘密調査ニ關スル嫌疑ヲ理由トシテ浦鹽駐在ノ我官民（箕妻海軍少佐、松井陸軍大尉郡司領事以下其ノ他官民十數名）ヲ拘禁シコトサラニ國交上不快ナル事端ヲ繁カラシムルト共ニ一面キハ我罹災窮民ニ對シ漁區、森林ノ提供ヲ申出ヅル如キ勞農政府一流ノ機微ナル手段ヲ弄シ且ツ此間同國官憲ハ對日意見ヲ發表スル等我國ヲシテ何等カノ必要上速ニ露國ト交渉開始ノ止ムナキハ至ラシメントスルヤニ觀察セラレタリ

大正十三年三月上旬芳澤公使ハカラハンニ對シ右浦鹽事件ノ交渉ヲナセル處カラハンハ依然日露間ニ正式交渉ヲ希望シ日本ガ露國ヲ承認スルニアラザレバ浦鹽問題ヲ解決シガタシト提唱セル等ノコトアリ極メテ複雑ナル曲折ヲ經テ結局三月下旬北京ニ於テ右兩者間ニ日露國交恢復ニ關スル豫備的意見交換ヲ開始スルニ至リシガ其後先方ハ更ニ之ヲ正式交渉トセンコトヲ要望シ遂ニ帝國ニ於テモ大正十三年五月十三日閣議ヲ經テ同月十四日北京ニ於テ我芳澤駐支公使ト駐支ソ聯邦大使カラハントノ間ニ正式交渉ニ入ルコトナレリ

日露正式交
渉開始
(大正十三
年五月)

正式交渉開始ノ初期ニ於テ我方ハ國交恢復ノ原則上ノ取極トシテ

- (一) 尼港事件ノ始末
- (二) サカレンノ利權問題

(三) 日露漁業條約ノ承認

(四) 舊條約、舊債權、私有財産問題ハ國際協定迄保留スルコト

(五) 右ノ諸項ヲ認ムレバ我政府ハ露國ヲ正式ニ承認シ又サカレンヨリ即時撤兵ス

ノ諸項ヲ提議シ但シ浦鹽拘禁問題ヲ解決セザレバ交渉ニ應ゼズトシ數回ノ會議ヲ重ネシガ五月下旬ニ於ケル交渉程度概ネ左ノ如シ

- 一、撤兵問題ニ關シテハ我提示條項ノ解決、基本協定成立調印ト同時ニ撤兵ニ着手スルコト
- 二、北樺太利權問題ニ付テハ日本政府又ハ日本ノ會社ニ富源開發ニ關スル長期ノ利權ヲ提供ス但シ細目ノ協定ハ國交回復後審議ス尙先方ハ利權問題ハ國交回復ノ結果ニシテ原因ニアラズト主張セリ

三、又尼港問題ニ關シ先方ハ陳謝狀ト雖片務的ニハ提出セズ西比利亞出兵中ニ於ケル日本軍ノ行動中尼港事件類似ノモノアルニ於テハ日本モ亦露國ニ對シ陳謝ノ意ヲ表スルコトノ保障ヲ得ントセリ

四、極東ノ利權問題ニ付テハ川上、ヨッフエー交渉ノ結果ヲ確認ス

五、國際信義ノ問題ニ關シ先方ハ舊條約ノ承認ハ原則トシテ承認セズ 但シポーツマス條約

ハ之ヲ承認スルモ漁業條約ハ後日改訂ス

而シテ我國ノ舊債務(私有財産共二億二千萬圓)ニ付我方ハ他日ノ國際會議ニ保留ス

六、通商問題ニ付我方ハ最惠國待遇ヲ主張セシモ先方之ヲ肯セズ

而シテ懸案タル浦鹽拘禁事件ニ付テハ右正式交渉開始後數日先方ハ五月二十三日ヲ以テ箕妻少佐以下ヲ釋放セリ

(註) 本交渉開始早々露國側ハ協定調印後ノ撤兵ニ關シ申出デ我方ニ於テモ之ガ實施上ノ調査ヲナシタル結果九月中旬迄ニ條約效力發生ノ運ビトナリタル場合ハ本年中ニ派遣軍ヲ撤去スルコトニ豫定セシガ爾後交渉容易ニ進行セズ最早季節ノ關係上實施困難トナリシヲ以テ大正十三年九月十九日ヲ以テ駐兵繼續ノコトニ決定セラレタリ

斯クテ交渉ハ曲折五十數回ノ會議ヲ經テ翌大正十四年一月二十日遂ニ兩國代表ノ調印ヲ了シ我國ニ於テハ翌二月二十五日ヲ以テ之ヲ批准セラルルニ至レルモノナリ乃チ之ニ依リ兩國ハ

一、「日本國及ソヴェート社會主義共和國間ノ關係ヲ律スル基本的法則ニ關スル條約」ニ於テ外交關係ノ確立、舊條約ノ効力漁業協約ノ改訂、通商航海條約ノ締結、宣傳禁止、富源開發ノ利權許與等恒久的又ハ一般的ノ問題ヲ規定シ

二、議定書(甲)ニ於テ兩國公館ノ引渡債權、撤兵(一九二五年五月十五日迄ニ撤兵ノコト)ニ關シ規定シ

三、議定書(乙)及交換公文ヲ以テ專ラ北樺太利權問題ヲ規定シ

其他聲明書、附屬公文ニ等ニ依リポーツマス條約ノ効力承認、尼港事件ニ對スルソ聯邦ノ陳謝等ヲ定メタルモノニシテ就中北樺太利權ノ問題ニ付テハ以下述ブルガ如ク最困難ナル論議ヲ重ネラレタル次第ナリトス

抑モ北樺太油田炭田ノ利權就中油田ニ關シテハ海軍ノ最モ重視セル處タリ乃チ正式交渉開始直後大正十三年五月二十日更メテ閣議ヲ以テ先ヅ左ノ通利權交渉ニ關スル大体ノ腹案ヲ定メラレタリ

(當時總理大臣清浦金吾、外務大臣松井慶四郎、海軍大臣村上格一)

大正十三年五月二十日閣議決定(外務省提案)

本月十三日閣決定日露諸案件解決法中尼港事件ニ關聯スル北樺太利權ニ就テハ日露條好ニ關スル取極中ニ於テ別紙所載ノ趣旨ヲ以テ取纏ムル様交渉セシムルコトト致度

利權關係交渉ノ一般經過

利權交渉ノ腹案ニ付閣議

尙別紙所載利權ノ種類及地域ニ關シテハ華府會議ニ於ケル行懸リモアルニヨリ我方ニ於テ利權ヲ獨占スルコトハ避クルヲ可トスベキノミナラズ露國側ニ於テモ廣大ナル地域ニ涉リ利權ヲ許與スルコトハ之ヲ困難トスル處アルベク又先方ニ提供スベキ利益配當ニ關シテハ客年非公式豫備交渉ノ際ニ純益ノ百分ノ五乃至六ヲ支拂フベキ旨提議セル次第アルニ依リ假ニ百分ノ五ト記シ置タルモ從來勞農政府ト外國人ノ締結シタル利權契約ノ例ニ依リ之ヲ推測スルニ先方ハ利益ノ折半等我方提案ヨリモ遙ニ自己ニ有利ナル條件ヲ提出シ來リ別紙所載ノ我方提案ニ同意セザルベシト思考セラル或ハ又露國側ヨリ合辦經營ヲ希望シ來ルコトヲ豫想シ置カザルベカラズ而シテ又利權企業ニ對スル課金ノ右免除ハ收益ト照應スベキ事項ニシテ之ニ關シテモ我方主張通りニ之レヲ免除セシムルコト或ハ困難ナルヤモ測リガタク尙又勞働者ニ關スル條件ニ就テモ露國ノ國內法トノ關係上我方提案ヲ應諾スルコト困難ナル事情アリ其他沿岸貿易等ニ關シテモ直ニ我方提案ニ同意セザルヤモ測リガタキ處斯カル場合ニハ交渉ノ成行ニ應ジ適宜調節スルコト止ヲ得ザルベシト認ム

別紙(摘要)

ソ聯邦政府ハ露領サカレン島ニ於テ左ノ地域内ニ於テ石油、石炭及森林ニ關スル富源開發ノ權利ヲ本協定實施ノ日ヨリ九十九年間左ノ條件ニ依リ

日本帝國政府又ハ日本政府ノ特許スル日本會社ニ許與スルコトニ同意ス 之ニ對シ日本側ハ右企業純收益ノ百分ノ五ヲ年々支拂フコトヲ約ス

本協定ノ効力發生以前ニ露國民又ハ別箇ノ政府若ハ國民ガ前記地域ニ關シテ有スル一切ノ權利及利益ニシテ前項ノ規定ト抵觸スルモノニ對シテハソ聯邦政府ニ於テ一切ノ責任ヲ負擔シ日本帝國政府又ハ日本ノ右會社ニ於テハ何等ノ義務ヲ負ザルモノトス

左記

第一、油田、炭田ノ地域

油田、南部油田

(南) 北緯五〇度三〇分

(北) 同 五二度

(東) 海岸線

(西) 海岸ヨリ二十露里ノ距離ニテ海岸ニ平行線

中部油田

(南) 北緯五二度

(北) 同 五三度

(東) 海岸線

(西) 海岸ヨリ三十露里ニテ海岸平行線

北部油田

(南) 北緯五三度

(北) 同 五三度五〇分

(東) 海岸線

(西) 海岸ヨリ二十露里ニテ海岸平行線

炭田

(南) 北緯五〇度

(北) 同 五一度三〇分

(西) 海岸線

(東) 海岸線ヨリ約六〇露里ノ距離ニテ海岸平行線

第二條 件 (要旨)

- 一、石炭石油ノ採掘、精製、生産品ノ販賣ニ異存ナキコト
- 二、本企業ニ必要ナル築港、鐵道、輸油管ノ敷設及通信裝置施設ノ權利ヲ獲ルコト
- 三、本企業ニ關スル勞働者ノ國籍ニ制限ナキコト勞働ノ管理及組織ニ干涉セザルコト
- 四、本企業ニ關シ一切ノ課金免除
- 五、本企業用品ノ輸出入課税免除
- 六、本企業附帶施設ノ爲船舶ノ出入、運搬ノ自由等
- 七、其他露國ハ本企業ニ便宜、援助ヲ與フルコト
- 八、仲裁條項ヲ仲裁委員會ニ附スルコト

(終)

(註) 右閣議ニ於テハ漁業ニ關スルコト及森林ニ關スルコトヲモ議セラレシガ爰ニハ其ノ記述ヲ省略ス

斯テ我方ハ北樺太ニ於テ長期利權ヲ提供ス但シ細目ノ協定ハ後日ニ讓ルベシトスル先方ノ案ニ對シ其利權地域、條件、等ニ付進ンデ此際相當具體的取極ヲナシ置クノ必要ヲ主張シテ討議ヲ重ネタリ

六月上旬海軍大臣ハ是等交渉ノ經過ニ鑑ミ利權ノ實情ニ精通セル稻石海軍機關少佐（正雄）ヲ會議ニ派スルコトトシ左ノ通訓令セリ

稻石機關少佐ヲ北京ニ派遣ス
（大正十三年六月）

大正十三年六月十日官房機密第八〇八號ノ二稻石機關少佐ニ訓令

出張任務ニ關スル件

貴官北京出張中ハ日露交渉ニ於ケル帝國政府代表ノ諮問ニ應ジ石油石炭利權ニ關シ必要ナル資料意見等ヲ提供シ代表ヲ補佐スベシ
右訓令ス

追テ任務遂行ニ關シテハ在北京帝國公使附武官ト密接ナル連絡ヲ保持スベシ

尙之ト同時ニ海軍次官ハ津田公使館附武官（靜枝）ニ對シ本交渉ニ付心得方覺書ヲ交付シ海軍ノ要望事項タル北樺太油田、炭田利權、下部黑龍江及松花江航行權、極東露領沿岸航行及出入

ノ自由獲得、領海問題ノ解決等ニ付及撤兵ニ關スル方針ヲ指示スル處アリシガ就中最大ナル案件ハ油田、炭田ニ關スル事項ナルヲ以テ極力帝國ノ要望通解決スルヲ要ス而シテ其ノ他ハ希望事項ナルガ故ニ交渉ノ進行ニ件ヒ問題ニ關聯シテ適當ナル機會ヲ捕捉シ交渉成立ヲ阻害セザル程度ニ於テ逐次目的ノ貫徹ヲ圖ルベキコトヲ以テセリ

時ニ六月十一日內閣更迭アリ加藤（高明）內閣（財部海軍大臣、繁原外務大臣）成立セルニ付芳澤公使ハ同月中旬一時交渉休止シテ打合狀況ヲ考慮シ利權地域ニ付テハ寧ロ全部ヲ一括シテ

東海岸ヒリシクボ川口以北、シユシツト半島トロント湖以南海岸線ニ沿フテ幅員三十露里ト

シ且ツ石油利權獲得上我讓歩ヲ要スル場合ニハ石炭利權區域ヲ「西海岸ワンチ岬以南日露國境以北ニシテ海岸線ニ沿フテ幅員二十露里」迄讓歩シ更ニ止ヲ得ザル場合ニ於テハ所謂封鎖炭田ノミニ限定スルモ致方ナシトシ此旨外務省及在支海軍武官ニ通知スル處アリタリ

（一三、六、二七、官房機密八八八ノ二）

芳澤公使ハ右歸朝中同年七月西機關大佐（軍需局第二課長）ノ案内ニテ特ニ驅逐艦ニ便乘北樺太ニ至リ亞港ツイーエ炭坑オハ油田等ヲ視察シ初メテ利權ノ實情ヲ明カニシタル上、北京ニ歸任八月上旬交渉ヲ再開シ利權ニ關シテハ基本條約ニ於テ一般的規程ヲナシ別ニ附屬議定書ヲ以テ

利權地域服案修正
（大正十三年六月）

內閣更迭芳澤公使歸朝打合
（大正十三年六月）

芳澤公使北樺太視察
（大正十三年七月）

現地事業調
書ヲ會議ニ
提示ス

(大正十三
年八月)

北樺太ニ於ケル油田、炭田、利權ニ付相當具體的條件ヲ規定スベク提議セル處露國側ハ飽クマ
デ附屬議定書ヲ設クルコトニ同意セズ此際ハ追テ締結セラルベキ利權契約ノ主義的規定ニ止メ
具體的事項ハ後日ニ讓ラントスルノ建テ前ヲ固持シ互ニ論議ヲ重ネツツアリシガ此ノ間、北樺
太ニ於ケル現在ノ事業ニ論及シ我方ハ先方ノ要求ヲ容レ八月二十九日後ニ記スガ如キ現地事業
調書ヲ作製シテ交付セリ

(註) 此ノ事業調書ハ爾後本交渉ニ於テ常ニ重要資料トシテ取扱ハレ遂ニ後日交渉成立ニ際シ
其ノ頃ノ現狀ニ基キ少修正ヲ加ヘテ議定書附屬文書トナレリ
但シ其作製ノ日附ハ初メノ儘八月二十九日トセリ

斯テ交渉ハ之等現業ノ保存繼續ニ關シテモ議セラルルニ至リシガ先方ハ先以テ前記ノ如ク利權
ノ主義的事項ヲ定ムルニ止メントスル自己ノ建テ前ヲ日本側ニ於テ應ズルニアラザレバ此上交
渉ノ餘地ナシト言明スルニ至レリ

九月九日我方ハ右露國側ノ主張ヲ應諾スルタメ左ノ了解ヲ條件トシテ提出セリ

一、右應諾ハ利權契約ニ關スル主義的規定ノ内容ニ對スル日本側主張ニ何等ノ影響ヲ及ボサ
ザルモノトス

利權ノ主義
的規定ニ付
折衝

二、露國側ハ日本側ガ八月二十九日提出ノ調書ニ記載セル作業ヲ保存繼續スルコトヲ承認シ
就中

(A) 現ニボーリング進行中ノモノハ其工事ヲ繼續シテ完成スルヲ得セシムルコト

(B) 現ニ出油スル地點及目下ボーリング進行中ノ地點ヨリ半徑二哩ノ範圍内ニ於テハ新
ニ試掘ヲ爲スヲ得セシムルコト

(C) 日本側ノ行ヒタル試掘ノ結果生スル出油ハ日本側ニ於テ之ヲ採取處分スルヲ得セシ
ムルコト

(D) 炭田ニ關シテモ右ニ準ス

三、利權契約成立ニ至ルマデノ間ニ於テ露國側ハ問題ノ油田及炭田ニ付右契約成立ノ障礙ト
ナルベキ何等ノ處置ヲ爲サ、ルコト

而ルニ先方ハ右第二ノ事業繼續ノ諸點ニ對シ反對シ我亦之ヲ讓ラス九月十六日芳澤公使ハ事業
ノ保存ト繼續トハ我方ノ最重要視スル所ナルヲ以テ互讓ノ誠意ヲ以テ我提案ヲ容レサルニ於テ
ハ此上交渉繼續ノ價值ナシト主張シカラハンハ決裂ノ威嚇ノ如キ恐ル、ニ足ラズトシ、交渉危
機ニ頻セシカ後先方ノ意向モアリ我方ニ於テモ從來交渉ノ曲折ニ顧ミ芳澤公使請訓ノ試案ヲ基

交渉危機ニ
類ス

(大正十三
年九月)

我方ヨリ利

權ノ主義的
規定ヲ提案
ス
(大正十三
年九月)

礎トシテ詮議ノ結果所謂主義的規定ヲ提示スルコトナリ幣原外務大臣ハ九月二十六日閣議ノ決
定ヲ經テ左ノ通芳澤公使ニ電訓セリ

北樺太利權ニ關スル主義的規定

(大正十三年九月芳澤公使ニ訓令)

締約國ハ本協約ノ効力發生後直ニ商議ヲ行ヒ右期日ヨリ×箇月以内ニ締結セラルヘキ利權契
約ノ基礎トシテ左ノ通約定ス

ソ聯邦政府又ハ其ノ指名スル當事者ニ對シ期限四十年乃至五十年ノ期間

油田地域四
千平方露里
要求

ケル油田

(一) 北サカレン東海岸ニ於テ日本ノ試掘ヲ行ヘル區域ヲ包含スル四軒平方露里ノ地域ニ於
ケル油田

(二) 西海岸ニ於テ舊封鎖區域ヲ包含スル一定ノ地域ニ於ケル炭田
ヲ開發スルノ權利ヲ許與スベク日本政府又ハ政府指定ノ當業者ハ右コンセツション開發ノ爲
メ必要ナル範圍ニ於テ北サカレンニ於テ伐木、港及鐵道ノ建設、輸油管ノ布設、電氣通信、
及其施設ヲナスコトル許サル、モノトス

日本政府又ハ指定スル日本當業者ハ右コンセツションニ對スル報償トシテソ聯邦政府ニ對シ
毎年

石油ニ付テハ純收益ノ二〇%又ハ年産五〇萬噸以下ナル場合ニハ企業ノ總生産額ノ五%、
年産額ノ五〇萬噸以上一〇〇萬噸以下ナル場合ニハ一〇%一〇〇萬噸以上ノトキ一五%ヲ

石炭ニ付テハ純收益ノ二〇%又ハ企業總生産高ノ五%ヲ提供スベシ

前記報償提供ニ願ミ且當該區域ノ地理上ノ位置其他一般狀態ニ依リ本企业ノ受クベキ不利ヲ
考量シ本企业ノ經營並ニ之ニ必要ナル一切ノ物件物資及本企业ノ生産物ノ輸出入ニ付テハ何
等課稅又ハ事業ノ成功ヲ阻碍スルカ如キ制限ヲ受クルコトナカルベキヲ約ス

ソ聯邦政府ハ本企业ニ對シ一切ノ合理的ナル保護及便宜ヲ供與スベク且本件コンセツション
ト抵觸スベキ何等ノ權利ヲモ設定又ハ支持セザルベシ

芳澤公使ハ右ニ依リ全月二十七日之ヲ會議ニ提示セシガ本案ハ爾後交渉ノ基礎トナリ幾多重要
ナル論議修正ヲ加ヘラレ遂ニ條約附屬議定書(乙)トナルモノニシテ其各事項別經過ニ關シ
テハ別ニ述ブルコト、シ以下單ニ其ノ大要ノ經過ヲ記述スルニ止ムベシ

露國側ハ右
ニ對シテ油
田四割及五
年間一平方
露里試掘許
可ヲ中心ト
スル提案ヲ
ナス
(大正十三
年十月)

我方ハ油田
六割獲得案
ヲ提出ス
(大正十三
年十月)

翌十月六日カラハン代表ハモスコ政府ヨリノ回訓ナリトテ油田四割及五年間一平方露里試掘許與其ノ他ノ對案ヲ提出シ彼我ノ主張著シク相違シ共ニ讓ラズ折衝其困難ノ狀況ヲ呈セリ十月下旬我海軍ハ交渉ノ經過ニ付更ニ研究ノ結果油田ノ利権地域ヲ全体ノ七割トシ残りノ三割ニ對シテハ外國ニ對シ優先權ヲ有スルコト其他ノ意見ヲ外務省ニ送付セシガ全省ハ右ハ機會均等主義ニ及シ折衝困難ナリトノ意見ニテ其後閣議ヲ以テ油田ニ對シテハ大体其ノ六割ヲ獲得スルノ案ヲ以テ進ムコトニ決セラレ之ニ基キ同月二十七日芳澤公使ヨリ日本側修正案ヲ先方ニ提案セリ

超テ十月三十日露國側ハ利権ノ主義的議定書及作業繼續ニ關スル公文書案ヲ提出スルニ至リシガ要スルニ現在ノ油井ヲ日本側ニ含マシムルコトノ外ハ依然油田地域四割及五年間一平方露里試掘ヲ許サントスル前回ノ提案ヲ固持シテ讓ラズ又油田分割ノ方法トシテ碁盤目分割法ヲ提案セリ

翌十一月十日芳澤公使ハ帝國政府訓令ニ基キ油田ノ碁盤目分法及試掘地域一千平方露里ノ先方提案ニ對シテハ其ノ面積及年限等ニ付條件ヲ附シテ全意ヲ與フルニ至リシガ油田ノ六割分配炭田ノ封鎖區域取得等ニ關シテハ極力我が原案ヲ主張シ翌十一日芳澤公使ハ右油田割合、炭田區

油田割合ニ
關スル折衝
相讓ラズ一
時交渉停止
ノ形トナル
(大正十三
年十一月)

非公式折衝
ヲ經テ我方
ヨリ折衷案
ヲ提出スル
コトトス
(大正十三
年十一月)

折衷案ニ付
海軍外務兩
省内議

域ノ問題ハ撤兵問題其ノ他利権關係以外ノ二、三ノ問題ト共ニ帝國ノ最重要トスル問題ニシテ之等ヲ解決スルニアラザレバ最早交渉ノ餘地ナシト述ベ先方モ亦頗ル強硬ニ十月三十日ノ露國提案ヲ固持シテ讓ラズ遂ニ一時交渉停止ノ形トナレリ

而シテ帝國政府ハ此儘交渉決烈ニ至ルハ大局上不得策ナリト認メタルヲ以テ外務大臣ハ閣議ノ決定ヲ經テ十一月十八日芳澤公使ニ電訓シ全公使ヲシテ非公式ニ帝國政府ハソ聯邦政府ガ寧ロ商議ノ決裂ヲ欲スルニアラザルヤ否ヤニ付卒直ニ真意ヲ披瀝センコトヲ望マザルヲ得ズ若シソ聯邦政府ニシテ決裂ヲ欲スルモノアラズトセバ此際(一)更ニ折衷案ヲ協定スルコト又ハ(二)我方ノ職員ヲモスコニ派シ直接ソ聯邦政府ト連絡シ以テ現在ノ爭點ノ解決ニ資セントスル何レカニ付會商セシメタル結果我方ヨリ折衷案ヲ提出シ交渉ノ進行ヲ計ルコト、ナレリ

此間海軍ハ局面展開ノタメ日露合辦ノ形式ニ依ル利権開發案ニ付テモ考究スル處アリシガ十一月下旬外務省側ハ油田地積ヲ五割トシ炭田ニ付テハ單ニ「西海岸ニ於テ利権契約ニテ決議セラ

ルベキ特定地積ノ炭田」ト改ムルコトヲ中心トシ且ツ利権料課稅其他ノ條件ヲ含ム一ツノ折衷案ヲ作成シテ海軍ニ内議スルニ至レリ

海軍ハ日露
合辦企業案
又ハ炭田ヲ
放棄シテ固
持スルヲ案
ヲ考慮セシ
ガ結局油田
五割(外務
案)案ニ同
意ス
(大正十三
年十二月)

我最後案ヲ
提出ス
(大正十三
年十二月)

ノ案ヲ外務省側ニ提案シ詮議スル處アリシガ結局十二月三日付ヲ以テ油田地積ヲ五割トスル外務省案ニ全意シ又炭田ニ關シテハ(イ)ツエ鑛、(ロ)所謂封鎖區域以外ニ於テ日露人共同經營ニ屬スル「ロガチ」炭鑛其他ヲ包含スルコト若シ先方ガ「ツ」エ地方ヲ拒絶スル場合ニハ封鎖炭田ニ關スル件ノミハ之ヲ後日ニ留保スル意味ニ於テ將來勞農政府ガ右地域ノ一部又ハ全部ヲ外國人ニ利權トシテ提供スル場合日本營業者ニモ均等ノ機會ヲ與ヘラルベキコトヲ此際協定スルヲ要ストナシ尙「課税及制限」「保護及便益ノ許與」等ニ關シテ外務省ニ回答シ且右ハ我方トシテ讓歩シ得ル範圍ノ最終案ニシテ特ニ「油田ノ分配」「炭田ノ地域」「課税及制限」ニ關シテハ海軍ノ最モ重視スル點ナル旨ヲ強張シ其ノ貫徹ヲ期シタリ

(十二月三日官房機密第一三三六號)

斯クテ芳澤公使ハ同月二十七日會議ニ於テ政府訓令ニ基ク油田五割及「ツ」エ炭田要求ヲ中心トシ又其ノ他ノ條件ニ付テモ幾分ノ讓歩ヲナセル折衷案ヲ提示スルニ至レリ
右我最後提案ニ對シ「カラハン」今回ノ日本提案ニ依リテ日本側ガ直ニ交渉成立ヲ希望シツ、アルコトヲ諒解シ本交渉モ漸ク成立ノ曙光ヲ認メタリ利權問題モ此ノ提案ニ依リ最早難問ヲ通過セリト信ズト述ベタルガ然モ尙ホ油田地域ニ付テハ北樺太ガ露國領土タルニ鑑ミ之ヲ平等ニ分

撤兵期日ノ
問題意見一
致ス
(十四
年
月)

炭坑問題意
見一致
(十四
年
月)

油田問題落
着
(十四
年
月)

配スルハ不可ナリ露國ガ日本ヨリモ多ク有スルコトガ「ブリ」ンシブルノ問題トシテ必要ニシテ此際日本側ニ四割五分以上ノ讓歩ヲナシガタク又炭田ニ付テハ「ツ」エ炭抗利權區域ニ含マシムルコトニ反對セリ芳澤公使ハ元來利權ノ許與ハ領土ノ割讓ニアラザルガ故ニ別ニ國民ノ體面ニ係ハハラザルベク況ンヤ本問題ハ日本ガ占領中現ニ繼續シツ、アル油田ヲ返還スルノ方法ニ關聯スルモノナリトノ旨ヲ以テ我提案ヲ固持セリ
尙先方ハ近ク條約成立ノ場合我撤兵期日ノ如何ヲ重視シ他ノ二、三ノ問題ト共ニ撤兵實施ニ關スル技術上ノ事項ニ付テモ討議ヲ重ネ翌大正十四年一月ニ及ビシガ撤兵問題ニ關シテハ結局先方ニ於テモ冬期ニ於ケル實施ノ困難ナルコトヲ理解シ一月十四日ノ會議ニ於テ我ガ意見ノ通全年五月十五日迄ニ之ヲ完了スルコトニ落着セリ
斯ノ如クシテ交渉ハ今ヤ油田ノ割合問題「ツ」エ炭坑問題並ニ第三インターナショナル宣傳禁止問題ヲ最後ニ殘スコトトナリシガ我強硬ナル主張ニ由リ一月十七日「ツ」エ炭坑問題ヲ讓歩セシメタリ

油田問題ハ尙最後迄先方ノ反對スル處ナリシガ遂ニ一月二十日ニ至リ辛ジテ我主張ヲ貫徹シ其ノ他ノ件モ概ネ先方ノ讓歩ニ依リ解決シ茲ニ約十ヶ月ニ亘ル交渉モ急轉直下同日(大正十四年

一月二十日)ヲ以テ兩國代表(支那共和國駐 特命全權公使芳澤謙吉、支那共和國駐劄ソ聯邦大使レツ、ミハイロヴィチ、カラハン)ノ間ニ調印ヲ了シ帝國ハ翌二月二十五日御批准ヲ經テ全二十七日公布セラレ露領樺太ニ於ケル我油田炭田、利權ノ基礎モ初テ確定スルニ至レリ乃チ利權問題ニ關シテハ

條約中利權
ニ關スル規
定要旨

「日本國及ソフイエト社會主義共和國聯邦間ノ關係ヲ律スル基本的法則ニ關スル條約」中第六條ニ於テ

兩國間ノ經濟上ノ關係ヲ促進スルタメ又天然資源ニ關スル日本國ノ需要ヲ考量シソフイエト社會主義共和國聯邦政府ハソフイエト社會主義共和國聯邦ノ一切ノ領域内ニ於ケル鑛産森林及其他ノ天然資源ノ開發ニ關スル利權ハ日本國ノ臣民、會社及組合ニ許與スルノ意嚮ヲ有ス

ト一般的ノ規定ヲナシ更ニ議定書(乙)ニ於テ北樺太利權ニ關シ

「日本軍隊ガ北サカレンヨリ完全ニ撤退シタル日ヨリ五ヶ月内ニ締結セラルベキ利權契約ニ對スル基礎」トシテ協定スル處アリ其要旨ヲ摘要スルコト左ノ如シ

一、一九二四年(大正十三年)八月二十九日日本代表ヨリ提出セル覺書(現業調書)ノ北サカレン油田地積ノ五割ノ開發ニ對スル利權ヲ日本政府ノ推薦スル日本ノ營業者ニ許與スルコトヲ約ス而シテ右油田ノ各ハ各十五乃至四十デシヤーチンノ基盤目方形ニ區分シ且ツ全地積ノ五割ニ相當スル右方形ノ數ハ日本人ニ割當テラルベシ但シ右日本人ニ貸與セラルベキ方形ハ原則トシテ相隣接スベカラザルモ日本人ノ現ニ掘鑿又ハ作業中ナル一切ノ坑井ヲ包含スベキモノトス右油田中日本人ニ貸付サル殘餘ノ地區ニ關シテハソフイエト政府ガ其ノ全部又ハ一部ヲ外國ノ利權ニ提供スルトキハ日本ノ營業者ハ均等ノ機會ヲ與ヘラルベシ

二、利權契約締結後一年内ニ選定セラルベキ一千平方、フェルストノ地積ニ涉リ北サカレンノ東海岸於テ五年乃至十年間油田ヲ調査試掘スルコトヲ日本營業者ニ許スコト又右調査試掘ノ結果油田ヲ確定セラレタルトキハ其ノ油田地積ノ五割ノ開發ニ對スル利權ヲ日本人ニ許與ス

(註)右試掘面積及其ノ選定權ニ關シ後日モスコイニ於ケル交渉ニ際シ解釋上ノ相違ヲ生ゼルコト別ニ細目交渉ノ部ニ述フルガ如シ

三、炭田ニ關シテハ利權契約ニ於テ決定セラルベキ特定ノ地積ニ亘リ北サカレンノ西海岸ニ於テ炭田開發ニ對スル利權ヲ日本政府ノ推薦スル日本當業者ニ許與スルコトヲ約ス又利權契約ニ於テ決定セラルベキ特定ノ地積ニ涉リツエ地方ニ於ケル炭田ニ關スル利權ヲ右日本國當業者ニ許與スルコトヲ約ス

右以外ノ炭田ニ就テハソフエイト政府ガ之レヲ外國人ノ利權ニ提供スル場合日本當業者ハ均等ノ機會ヲ與ヘラルベシ

四、右油田及炭田ノ開發ニ對スル利權ノ期間ハ四十年乃至五十年タルベシ

五、利權報償ハ

炭田ノ場合

總産額ノ五%乃至 八%

油田ノ場合

總産額ノ五% ー 十五%

ヲ毎年日本當業者ヨリ提供スルコト自噴井ノ場合ニ於テハ右報償ハ其ノ總産額ノ四五%迄之ヲ増加ストルコトヲ得

六、企業ニ要スル木材ノ伐採、交通運輸ノ施設ヲ許スコト

七、企業ニ要スル物件、物資、又ハ生産物ノ輸出入ハ無稅タルコト且ツ企業ノ收益的經營ヲ事

實上不可能ナラシムル如キ課稅又ハ制限ヲ加ヘザルコト

八、ソフエイト政府ハ右企業ニ對シ保護及便宜ヲ與フルコト

九、前諸號ノ細目ハ利權契約ニ於テ協定セラルベキコト

尙現地事業ニ關シテハ日本軍隊撤退完了後五ヶ月内ニ行ハルベキ利權契約ノ締結ニ至ル迄續行セラルベキコト

但シ事業ノ地區、人員、機械其他ノ條件ハ一九二四年八月二十九日日本全權ノ提出セル覺書ニ依ルコト産出物ハ之ヲ輸出販賣スルヲ得ザルコト

(従業員及裝備用ニ供スルヲ得) 及

日本國無線電信ニ關スル問題ハ將來ノ協定ニ留保セラルベク且私人及外國人ノ無線電信所設置ヲ禁止スルソ聯邦ノ法令ニ合致スル方法ニテ調整セラルベキコトニ付公文ヲ交換セリ

而シテ右一九二四年八月二十九日我方ヨリ提出セル覺書ハ其後調印當時ノ現狀ニ依リ小修正ヲ加ヘテ四者各議定書ニ添付セラレタリ乃左ノ如シ

一九二四年八月二十九日、日本國代表者ニ依リソ聯邦ノ代表者ニ交付セラレタル覺書

一、此等試掘作業ハ政府ノタメニ株式会社北辰會ニ依リテ行ハレ居リ
二、

作業	位置	地積	試掘 出油 無油
オハ	オハ河ノ流域ニ於テウルクト灣ノ西二哩半	二、五〇〇	四
エハビ	エハビ灣ノ西一哩	一、六〇〇	ナシ
ピリトウン	ピリトウン河ニ沿ヒキヤツクル灣ノ南西六哩	一、二〇〇	ナシ
ヌトヴオ	ヌトヴオ河口ヨリ西五哩	二、五〇〇	一
チャイヴオ	ボアタシン河ニ沿ヒチャイヴオ灣ノ西三哩	二、二〇〇	一
ヌイヴオ	ノグリツク河(トウイミ河ノ支流)ノ流域ニ於テヌイヴオ灣ノ西七哩	一、六〇〇	一
グイグレ	トウイミ河ノ流域ニ沿ヒ同河ノ河口ノ南三哩	八〇〇	ナシ
クトウイ			
カタングリ	ナピリスキー灣ノ北カタングリ湖ノ岸	一、六〇〇	一

三、使用セラルル専門家

労働者

二〇
四〇〇(夏季)

四、機械

ハイドロリックロータリ式

スタンダードケーブル式

ダイヤモンドボーリング式

スリングボーリング式(人力)

五、設備

(イ) 通信用 各所ノ作業ヲ連絡スル電話線オハ及チャイヴオニ於ケル無線電信所

(ロ) 運搬用 舢及傳馬船十二隻ノ外各所ノ作業ヲ連絡スルタメ夏季使用セラル、小型蒸汽船

一隻及發動機船數隻

(ハ) 建設物

職員、労働者、家屋 掘鑿用機 機關場	オハ	エハビ	ピルト ウン	ヌトヴ ヴオ	チャイ ヴオ	ヌイ ヴオ	グイ グレ	カタ ングリ
三〇	一	二	七	八	六	一	一五	
一一	三	三	一	二	二	二	一	一
六								

貯油所 (土製)	三
燃料油 タンク (鋼製)	四

六、輕便鐵道 ナシ

ウルクト灣トオハニ於ケル工場トノ間二哩半ニ亘ルトロッコ線及カタングリトナビルトノ間約三哩ニ亘ル他ノトロッコ線

七、石油ノ輸出 ナシ

炭坑作業

一、作業者

ドゥーエ鑛山 三菱會社ハ占領軍ノタメニ作業シ居レリ

ロガトウイ鑛山スタヘーフ會社及三菱會社ガ合同事業トシテ作業トシテ作業シ居レリ

二、鑛山ノ位置

ドゥーエ鑛山 海ニ近キポストウアヤノ流域ニ於テアレキサンドロウスク港ノ南約六哩、

現ニ作業中ノ水 平坑ニ但シ堅坑ナシ、一九二三年ノ産額約五萬噸

ロガトウイ鑛山 海ニ面シアレキサンドロウスク港ノ南約十哩、現ニ作業中ノ坑ニ堅坑

ナシ

一九二三年ノ産額約三萬噸

三、専門家及労働者ノ數

ドゥーエ鑛山 専門家 五 労働者 約二〇〇

ロガトウイ鑛山 " 三 " 約一五〇

(右數字ハ夏季ノモノトス)

四、機械

ドゥーエ鑛山ニ於テハ小型機關車ハ石炭ノ運搬ノ目的ノ爲ニ使用セラル

ロガトウイ鑛山ニ於テハ機械ヲ使用セズ採掘及運搬ハ人及馬ニ依リテ行ハレ居レリ

五、建設物

ドゥーエ鑛山ヨリ海岸ニ至ル一哩強ノトロッコ線及ロガトウイニ於ケル四分ノ一哩弱ノ他

ノトロッコ線ヲ除キ炭坑用ニハ特種ノ建設物ナシ

六、輸出

ドゥーエ鑛山ノ産額ハ占領軍及占領區域内ノ住民ニ依リ消費セラレ島外ニ搬出セラル、モ
ノナン
ロガトウイ鑛山ノ産額約三萬噸ハ三菱及スタヘーフニ依リテ一九二三年ニ輸出セラレタル
コトアリ

芳澤謙吉

第四章 日露交渉

第三節 北京會議北樺太利權ノ事項別交渉經過

目次

利權ノ許與者.....	八〇四
利權ノ期間.....	八〇五
利權ノ地域(油田).....	八〇五
利權ノ地域(炭田).....	八二〇
利權報効金(石炭).....	八二四
課税、保護事項.....	八二五
現業ノ保存繼續(附無線電信).....	八二七
附帶事業施設.....	八三二

第四章 日露交渉

第三節 北京會議中北樺太利權ノ事項別交渉經過

北京ニ於ケル日露正式交渉ノ一般狀況等概ネ既述ノ如シ本節ニ於テハ右交渉中大正十三年九月下旬我方ニ於テ利權主義的規定案ヲ會議ニ提出セル以降ノ各利權事項別交渉ノ經過ヲ略述セン
トス

利權ノ許與者

○利權ノ許與者

日本則提出ノ主義的規定案ニ於テハ利權ヲ許與セラルベキモノヲ「日本國政府又ハ日本國政府ノ指定スルコトアルベキ日本當業者」トセリ

(大正一三、九、二七)

之ニ對シカラハン代表ハ學農政府ハ何レノ外國ニ對シテモ政府ニハ利權ヲ許與シガタキコト其他ヲ述ベタルカ

十月二十七日日本側ノ提出セル修正案ニ於テ右露國側ノ意見ヲ考慮シ單ニ日本國政府ノ推薦ス

ル日本當業者」ト改メ大体意見ノ一致ヲ見タリ

○利權期間

利權ノ期間

主義的規定ニ關スル日本提案ニ於テハ利權期間ヲ四十年乃至五十年トセリ

(大正、一三、九、二七)

之ニ對シ初メ先方ハ期間ノ最低ヲ三十年トスルノ意見アリシガ十月三十日露國側提案ニ於テ我方ノ意見ト一致セリ

利權ノ地域(油田)

○利權ノ地域(油田)

日本ノ提出セル主義的規定案ニ於テハ

「北樺太東海岸ニ於テ日本ノ試掘ヲ行ヘル區域ヲ包含スル四千平方露里ノ地域ニ於ケル油

田開發ノ權利」

日本案、四千平方露里要求

ヲ要求セリ(大正一三、九、二七)

之ニ對シカラハンハ右日本案ハ北樺太油田ヲ獨占スルモノニシテ不可ナリトシ私案トシテ全油

露案、四割
提供及五年
間二千平方
露里試掌權
提供

田ノ一五%乃至二〇%ノ程度ニ致度旨ヲ述ベタル處

八〇六

十月六日モスコイヨリノ回訓ナリトシテ左記要旨ノ提案ヲナスニ至レリ

○ 聯邦政府ハ既ニ確定シ居レル油床及將來日本側ニ於テ發見スル新油床ニ對シ其ノ主要部
分ヲ日本ニ附與スルコトニ全意シ又既ニ確定セル油井ハ四割ヲ日本ニ許ス
斯テ現在ノ作業地域ハ聯邦政府ノ提議スル比例ヲ以テ將來ノ利權契約ノ目的物中ニ包含
セラルベシ

○ 外ニ五ヶ年間一千平方露里地域ノ調査ヲ許シ此結果決定セル油床ノ四割ヲ日本ニ提供ス
(右露國案ニ關シカラハンハ芳澤公使トノ應答ニ於テ要スルニ現在油田ノ四割及將來發
見スル油田ノ四割ヲ提供スルノ趣旨ナリ又露國側地質家ノ調査ニ依レバ北サカレンニ於
ケル油田ノ數ハ二十一ヶ所ニシテ其ノ四割ト云ヘバ日本ノ現ニ作業セル八ヶ所ハ殆んど
包含スルモノト解シ得ベシト述ベタルカ素ヨリ之レヲ保證スト云フニハアラス依テ芳澤
公使ハ現ニ試掘中ノ油田ハ確實ニ全部ヲ日本ニ提供スルコトガ保證セラレ其ノ外數千平
方露里ノ試掘區域ヲ要求スルハ我最小限ノ主張ナリト應答セリ
後數回ノ交渉ヲ經テ十月二十七日

日本ノ修正
案
(六割要求)

日本側修正案ヲ提出ス乃チ

- 八月二十九日覺書ノ現在油田ノ各個ニ付其地積ノ六割ノ開發ヲ日本側ニ許スコト
- 右ノ六割中ニハ現在ノ一切ノ坑井包含ス
- 残り四割ノ油田ニ關シテハ三年以内ニ露國側ガ自ラ開發ヲ行ハザルトキハ之レヲ日本ニ
許スコト
- 前記覺書以外ノ確定油田及日本側ガ調査ノ結果將來定メラルベキ油田ニ就テモ其六割ノ
開發ヲ日本ニ許シ殘部ニ對シ露國側ガ三年以内ニ自ラ開發ヲ行ハザルトキハ之ヲ日本ニ
許スコト

ヲ提案セリ

露國側讓歩
セズ又油田
基盤目區分
法ヲ提案ス

之ニ對シカラハンハ依然油田四割、試掘一千平方露里ヲ主張シ且油井ノ全部ヲ日本側ニ包含セ
シムルコトニ反對シ尙ホ油田分割ノ方式ハ相隣接セザル基盤目ノ區分ニ依リ分割スルモノナル
コトヲ説明シ芳澤公使之ニ反對ヲ表セシガ十月三十日ニ至リ

露國側ハ利權ノ主義的議定書及作業繼續ニ關スル公文書案ヲ提出シ油田地域ニ關シテハ

- 八月二十九日調書記載各油田ノ四割ノ開發ヲ日本ニ許ス但シ相隣接セザル基盤目區劃ニ

八〇七

日本提案十
年間一千平
方露里調査
試掘
油田六割要
求固持

依リ分割スルコト

○ 現油井ハ日本側ニ包含セシムルコト

○ 右ノ以外北樺太東海岸ニ五ヶ年間一千平方露里ノ試掘權ヲ許シ其結果確定セル油田ノ四割ノ開發ヲ日本ニ許スコト

等ヲ提案主張シ尙右基盤目一區劃ノ面積ハ二デシヤーチンノ考ナルコトヲ説明セリ
帝國政府ハ芳澤公使ニ對シ

○ 油田六割獲得ヲ今一應主張スルコト

○ 油田基盤目區劃ノ件ハ先方ニ全意ス但シ一區劃ハ少クモ二十デイシヤーチンタルコト

○ 露國ニ返還スル部分ニ對シテハ我ニ優先權ヲ與フルコト尙露國側ガ經營ヲ決定スベキ年
限ヲ三年ト限定スル我提案ハ削除差支ナキコト

○ 試掘油田ニ關シテハ利權契約後一ヶ年内ニ日本當業者ニ於テ選定シ十箇年内ニ調査試掘
ヲナスノ權利ヲ認ムルニ於テハ地域ハ先方提案ノ一千平方露里ニ全意スベク但シ其ノ結
果發見セル油田ノ分割ニハ我ニ六割ヲ與フルコト

等ヲ訓令セリ(大正一三、一一、八)

日露主張ヲ
固持シ交渉
一時停止ノ
形トナル

(十三年
十一月)

日本最後案
五割要求

十一月十日芳澤公使ハ右訓令ヲ執行シ特ニ油田、炭田、地域ニ關シテハ強硬ニ主張スル處アリ
シガ露國側ハ其ノ十月三十日案ヲ固持シテ讓ラズ遂ニ交渉ハ一時停止ノ形ヲ呈セリ

同月下旬芳澤公使ハ前節ニ述ブルガ如ク訓令ニ依リ非公式ニカラハント會商ノ結果此際我方ヨ
リ一ツノ妥協案ヲ提出シテ交渉ノ進行ヲ計ルコト、ナレリ乃チ政府ノ訓令ニ基キ十二月二十七
日左記要領ノ最後案ヲ提出ス

○ 八月二十九日提示セル我が現業調査記載各油田ノ五割ヲ日本ニ割ツルコト 又基盤目區
劃ハ一區十五デシヤーチンヨリ少カラザルコト、

○ 残り五割ノ油田ニ對シテハ之ヲ外國ニ許ス場合機會均等權ヲ日本ニ與フベシ

○ 利權契約後一ヶ年内ニ選定セラルベキ東海岸ニ於ケル一千平方露里ノ地域ニ付五年乃至
十年間ノ試掘權ヲ日本ニ與ヘ此ノ試掘ノ結果得ベキ油田ノ五割ヲ日本ニ許スコト

然ルニ同月二十九日カラハンハ北樺太カ自國領土タル以上平等ニ分配スル如キハ容認シガタク
私案トシテ日本ニ對シ油田地域ノ四割五分ヲ許スコトヲ提議シ芳澤公使之ニ反對セリ

而シテカラハンハ基盤目區劃ノ面積ニ付テハ日本最初ノ提案通二十デシヤーチンニテ可ナル旨
本國ヨリ回訓ニ接セリト述ベタリ

露、油田四割五分案ヲ提出シ日本ハ飽ク迄五分ヲ要求ス露、遂ニ五割提供ニ讓歩シ彼我調印ニ達ス
(大正十四年一月)

十四年一月六日、先方ハモスコイ回訓ナリトテ未解決ノ他ノ諸問題ニシテ露國ノ希望通トナラバ油田ハ四割五分ヲ分割スルコトニ讓歩スル旨ヲ述べタルモ我方ハ飽ク迄五分ヲ主張セリ十四年一月八日、此ノ頃ニ至リカラハンハ他ノ問題ニ付テハ漸次讓歩ノ態度ヲ示セルニ不拘油田地域問題ニ關シテハ飽ク迄主義上ノ問題トシテ讓ラズ最後迄最モ強硬ニ日本四割五分ヲ主張シタリガ一月二十日最終日於テ結局カラハンハ然ラバ一ツニ協定ヲ纏メントスル誠意ヨリ自分一個ノ危険ニ於テ日本ノ要求ニ應ズルコト、スベシト述べ遂ニ彼我意見ノ一致ヲ見ルニ至リ油田等分ノコトニ決セリ

(註) 一千平方露里試掘ノ件ニ關シテハ後日モスコイニ於ケル細目交渉ニ當リ其ノ面積及選定權ニ付解釋上ノ問題ヲ生ゼルコト別ニ述ブルガ如シ

利權地域(炭田)

日本ノ主義的規定案ニ於テハ

○ 西海岸ニ於テ舊封鎖區域ヲ包含スル一定ノ地域ニ於ケル炭田ノ開發權ヲ要求セリ
(大正一三、九、二七)

カラハンハモスコイ回訓ヲ披露シ炭田ニ關シテハ

○ 北樺太西海岸ニ於ケル石炭層ヲ提供スベク其ノ範圍ハ將來ノ利權契約ニ依ル

○ 禁止區域ノ開放ニハ應ジガタシ

トナセリ(十月六日)

之ニ對シ芳澤公使ハ已ニ三菱スタヘーフ合同ニテ事業ガ經營セラレアルコトニ言及セシガカラハンハ之等炭坑ノ經營ハ帝政露國又ハ日本ニヨリ許與セラレタルモノナルベク勞農政府ハ一九一八年國有法ノ發布以來舊法令ニ基ク一切ノ權利ヲ認メズ殊ニ帝政政府ノ行ヘルコトニ對シテハ國家ノ債務ト雖モ之ヲ否認セントスルコト夙ニ御承知ノ通ナリト辨ズル處アリ之ニ對シ芳澤公使ハ世界各國ノ等シク認メタル帝政露國ノ法令竝ニ舊政府ノ行ヘル處ヲ一切認メズトノコトナラバ千島、樺太、交換條約ヲモ無効トシ日本ハ北樺太ヲ取戻スコト、ナリ其結果最早ヤ利權問題ニ付討議ノ必要モナキコト、ナルベシト應酬セルコトアリ
後交渉ヲ重ネタル末芳澤公使ハ一ツノ私案トシテ封鎖區域中少クモ現ニ作業中ナルツエ地方ハ之レヲ日本ニ許與スベク而ラザレバ現在事業ノ繼續ヲ許スコトモ何ノ意味ヲナサズト主張セルガカラハンハツエハ太平洋岸露領ニ於テ唯一ノ良産炭地ナルヲ以テ露國トシテ之レヲ手放シガタシトセリ(十月十七日)

カラハンハ炭田區域ニ關スル私案トシテ

○ 舊封鎖區域ヲ外國人ニ許ス場合ニハ日本ノ優先權ヲ認ムルコト

○ 封鎖區域以外ニ於テ一定地域ノ炭坑ヲ日本ニ許與スルコト

ヲ提案セシガ芳澤公使ハツイー炭坑ヲ我ニ許スベキコトヲ主張シテ右案ニ反對セリ

十月二十七日、日本側ハ修正案トシテ

○ 舊封鎖區域炭田中現ニ日本側ニ於テ稼行中ノ炭坑ヲ包含スル南部三割及

○ 右封鎖區域以外ニ於テ特定地積ノ炭田開發ヲ許スコト

○ 舊封鎖區域炭田中爾余ノ部ニ對シ三年以内ニ露國側ガ自ラ開發ヲ行ハザルトキハ其ノ開

發ヲ日本ニ許スコト

ヲ提議セリ

十月三十日、露國側ハ議定書案ヲ提出セルガ炭田ニ關シテハ依然トシテ單ニ將來ノ利權契約ニ

依リ定メラルベキ一定地區ノ炭坑開發ヲ許スベシトナシ尙ホ芳澤公使ノ質問ニ對シ現ニ作業中

ノ炭坑及封鎖區域ハ何レモ所謂「特定地域」ニ含マレザルモノナルコトヲ説明セリ

其ノ後日本側ハツイー炭坑ヲ含ム一定地域ノ炭田ト並ニ其ノ他ノ部ニ對スル外國トノ均等ヲ權要

○ 利權報効
金
(石油)

利權報効金及課税ニ關スル事項

石油利權報効金

大正十三年九月二十七日、主義的規定ニ關スル日本提案ハ

純收益ノ 二〇%ヲ支拂フコト

又ハ

年産額五十萬噸以下ノ場合、總産額ノ

五%

〃 五十萬噸―百萬噸ノ場合〃

一〇%

百萬噸以上ノ場合

一五%

トセリ

十月六日 カラハンハモスコト回訓トシテ

總産額ノ一割乃至一割五分ト定メ其ノ詳細ハ將來ノ交渉ニ於テ専門家參加ノ上協
定ス但シ噴出油ノトキハ五割ヲ課ス

コトヲ提案シ

十月三十日 露國提案ノ際ニモ依然前案ヲ固持セリ

十一月十日 日本側ハ自噴井ニ對シ四割五分迄ハ差支ナシトセリ

十二月二十七日 日本側最後案ニ於テハ總産額ノ五乃至十%、噴出油ノトキ四十五%トシ詳細
規定ヲ後日ニ讓ラントスル露國側意見ニ全意シ先方モ大体異議ナシトセリ

石炭利權報効金

大正十三年九月二十七日、日本側ノ主義的規定案ニ於テハ

純收益ノ 二〇% 又ハ總生産額ノ五%トナセリ

○利權報効
金
(石炭)

十月六日 露國側ハ總産額ノ五—一〇%ト定メ詳細ハ後日利權契約ニ於テ定ムベキコ
トヲ定案ス

十月三十日 露國提案ニ以テハ五—一二%トシ詳細ハ利權契約ニ於テ定ムベキコトヲ主
張ス

十一月十日 日本側ハ其ノ原案五%ヲ主張シテ讓ラザリシガ

十二月二十七日 我最後案ニ於テハ一步ヲ讓リ總産額ノ五—八%トシ詳細ハ利權契約ニ於テ
取極ムベキコトヲ提案シ

結局意見ノ一致ヲ見タリ

課税免除及保護便益供與ニ關スル事項

○課税、保
護事項

大正十三年九月二十七日日本側ノ主義的規定案ニ於テ別記ノ如ク石油、及石炭利權ニ對スル
ヤルチーヲ提案スルト共ニ課税其ノ他ニ同シ

左ノ要旨ヲ提議セリ

○事業經營用物件及生産物ノ輸出入ニ付テハ何等ノ課税又ハ事業ノ成功ヲ阻害スル如キ制

限ヲ加ヘザルコト

○ 本事業ニ對シ保護及便宜ヲ與フルコト

○ 本件コンセツショント抵觸スベキ何等ノ權利ヲモ設定又ハ支持セザルコト

右ニ對シカラハンハ之等ノ事項ハ後日ノ交渉ニ讓リタキコトヲ述ベ爾後主ニ報効金ノ問題ニ付意見ヲ交換セリ

十月三十日ノ露國側對案ニ於テモ之等ノ事項ニ觸レザリシガ

十一月上旬我政府ハ報効金問題ノ外課稅免除、企業ニ對スル保護、便益ノ供與並ニ本利權ト抵觸スル權利ノ設定ヲ支持セザルコトハ何レモ日本政府ノ重要視スルモノタルコトニ付先方ノ注意ヲ促ス處アリ尙ホ十二月二十七日我最後提案ニ於テモ伐木、通信、運輸ノ施設ヲナスコトト共ニ右諸項ヲ繰返シ主張セリ 先方ハ之等ニ對シ強キ反對ハナカリシ如キモ翌十四年一月ニ入リ日本側提案ニ於テ

It is agreed that

the enterprises shall not be subjected to any such taxation

or restriction as may in fact render their remunerative

working impossible

トアル内 any special taxation ト改ムルコトヲ主張シ我反對ニ係ラズ最後マデ主張セシガ一月二十日ニ至リ先方ハ遂ニ之ヲ撤回シ彼我意見ノ一致ヲ見タリ

現業ノ保存、繼續ノ問題

北樺太ニ於ケル我ガ現地事業ヲ保存シ且繼續スルノ件ハ本交渉ノ初期ニ於テ彼我交渉ノ主要ナル題目ノ一ツトシテ取扱ハレ大正十三年八月二十九日我ガ現業調査書ノ提出トナリ次デ九月ニ至リ當時露國側ガ今回ノ交渉中利權問題ニ關シテハ單ニ主義的規定ノミニ止メントスル主張ニ對シ我ハ全意ノ條件トシテ之等現地事業ノ保存繼續ノ承認其ノ他ヲ要求セルコト既ニ前節ニ於テ述ブル處ノ如シ

其ノ後十月上旬カラハンハ之等事業ノ保存行爲ニハ異存ナク又油田ノボーリングニ就テハ好意ヲ以テ審議スベキモ炭田事業ノ繼續ニ關シテハ先ヅ產出物ノ輸出販賣ニ關スル日本ノ態度如何トナシ芳澤公使ハ訓令ニ依リ我提案ニハ輸出販賣ヲモ含ム旨ヲ答ヘタリ

十月六日

○ 現業ノ保存繼續

露國側ハモスコイヨリノ回訓ナリトテ
作業ノ繼續ハ之レヲ承認ス

但シ

○繼續ノ期間ハ六ヶ月タルコト産出炭油ノ輸出販賣ヲ禁止ス

○繼續事業ハ八月二十九日調書ノ範圍内ナルコト

右繼續ハ將來ノ日本ノ權利トハ關係ナキコト乃チ現在作業中ノ地域ガ其儘日本ノ權利ニ
歸スル次第ニアラザルコト

ヲ條件トセリ

十月三十日

露國側ノ提出セル議定書案ニ於テモ前回ト全趣旨ヲ述ベ且ツ作業繼續ノ問題ト關聯シテ現地
ニ於ケル日本無線電信ノ使用ヲ禁止スル旨ヲ提議シ露國法ニ依レバ無線電信ノ如キハ外國人
ニ對シテノミナラス自國民個人ノ施設モ許サズ専ラ政府ノ管掌スル所ナルコトヲ述ベタリ

十一月十日

芳澤公使ハ政府ノ訓令ニ基キ現地事業ニ依ル産出ノ炭油等ハ事業用トシテハ使用ヲ認ムルコ

ト及無線電信使用禁止條項ノ削除ヲ要求セルガ無線電信問題ハ露國側ハ容易ニ之レニ應セズ
十二月二十七日

我最後案ニ於テハ

○現業繼續期間ハ後日露國ト我畫業者トノ利權契約締結マデ六ヶ月トスルコト 産出炭油
ノ輸出販賣ハナサルハモ事業用ニハ使用シ得ルコト、シ

○又無線電信問題ニ關シテハ後日ノ商議ニ讓ルコトヲ提議セリ

爾後露國側ハ作業繼續期間ニ間シ「利權契約締結迄六ヶ月」トスル日本案ハ單ニ「六ヶ月」ト
改ムルヲ要ス而ラザレバ日本側ニテ何時マデモ繼續セラルル虞アリトシ容易ニ讓ラザリシガ
大正十四年一月八日ニ至リモスコイ回訓ナリトテ我提案通利權契約締結マデ六ヶ月ノ期間繼續
ノコトニ同意セリ

而シテ其後豫テ本交渉中重要問題ノ一ツトシテ討議セラレツツアリシ撤兵期限ニ付先方ハ我方
ノ主張通大正十四年五月十五日トスルニ同意スルニ及ビ事業ノ繼續期間モ右ト關聯期撤兵セシ
メ交換公文ノ如ク日本軍隊撤退完了後五ヶ月内ニ行ハルベキ利權契約ノ締結ニ至ルマデ續行シ
得ルコトニ決定セリ

又無線電信問題ニ關シテハ十二月我最後案以後露國ハ日本側ニ於テ之レヲ使用スルノ要アルコトハ諒トスルモ之ヲ露國ノ支配下ニ置クヲ要ストシ
芳澤公使ハ通信ニ關スル露ノ主權ハ之ヲ尊重スルニ付キ後日ノ協定ニ至ルマデ必要ニ應ジ我が使用ヲ主張シ

カラハンハ露國ニ於テハ其ノ領土内ニ外國ノ無線電信ハ存在シ得ザルナリ而ルニ日本ノ提案ニテハ露領土内ニ外國無線電信ガ存在シ得ルヤモ知レズトノ疑ヲ生ズベシトシ容易ニ折合ザリシガ

十四年九月ニ至リ先方ハ北樺太ニ於ケル無線電信ハ露政府ノ國有タルコトヲ考慮ニ入レテ日本案ノ如ク後日ノ商議ニ讓ルコトヲ提案シ

芳澤公使ハ大体異存ナキニ付尙請訓スベキ旨ヲ答ヘタリ

後一月十六日芳澤公使ハ小修正ヲ提案シカラハン又小修正ヲ申出タリシガ

十四年一月二十日ニ至リ我之レニ同意シ茲ニ意見ノ一致ヲ見タリ

尙ホ同日芳澤公使ハ曩キニ提出セル十四年八月二十九日現業調書中其ノ後今日迄ノ事業ノ進行ニ依リ修正(オハ出油井三ヲ四ニ改メ其他小修正)ヲ提案シ先方モ之ニ同意センガ調

書ノ日付ハ先方ノ意見ニ依リ八月二十九日ノ儘トシ
茲ニ現業問題ヲ解決スルニ至レリ

附帶事業施設ニ關スル事項

○附帶事業
施設ニ關
スル事項

大正十三年九月二十七日、我主義的規定案ニ於テ芳澤公使ハ
コンセツション開發ノタメ必要ナル範圍ニ於テ北サカレンニ於テ

○伐木、 ○港及鐵道ノ建設、 ○運輸窠布設、

○電氣通信及其他ノ施設

ヲ許サルベキコトヲ提議シカラハンハ是等ノ具体的事項ハ後日利權契約ニ讓リタシトナシ
十月一日ノ會見ニ於テ露國側ハ

「日本當業者ハ交通、及材料、產出油炭ノ運搬ヲ便宜ナラシムルタメ種々ノ設備ヲ建設スル
ヲ許サルベク之ガ詳細ハ將來ノ利權契約ニ規定セララルベシ

ト提議セリ

後十月二十七日、日本修正案十月三十日露國提案等ニ於テ交渉アリシガ根本ニ於テ大ナル意見

ノ差ナク結局「企業ニ要スル伐木、交通、運輸ノ施設ヲ許ス」コトニ落着セリ
但シ我無線電信ノ歸屬及使用問題ニ關シテハ交渉ノ中途ニ問題トナリ遂ニ後日ノ商議ニ讓レル
コト現業保存繼續ニ關スル部ニ述ブル處ノ如シ

第五章 現地事業ノ經過概要（附試掘調査一覽表）

本章ニ於テハ専ラ油田現地事業ノ計畫實施ニ關スル概況ヲ述ベ以テ前各章ニ於ケル行政的沿革
ノ参照タラシメントス而シテ大正八年度以前ニ於ケケル官民ノ調査事業ニ付テハ既ニ第二章ノ
記述ニ含マレアルヲ以テ本章ニハ大正九年度以降ノ分ニ限ルコトトシ又地質調査ノ詳細ハ各其
ノ報文ニ明ナルヲ以テ此處ニハ省略ス 尙坑井掘鑿ニ關スル年月ニ付テハ右地質調査報文ト海
軍省ノ文書（毎年度事業方針決裁文書又ハ北辰會報告等）トノ間ニ多少一致セザルモノアリ而
シテ本章ノ記述ハ海軍省ノ文書ニ依レリ

海軍自ラ油
田調査ニ進
出シテ北辰
會ヲ援助ス
ルコトトナ
シ（大正九年
度）
ノ事業

大正九年北樺太軍事占領後第三章ニ記述スル如キ経緯ヲ以テ同年度以降海軍自ラ臨時軍事費ヲ
支出シテ調査ニ着手シ以テ北辰會ノ事業ヲ補助指導スルコトトシ其試掘作業ハ之ヲ同會ニ委託
セリ而シテ北辰會自身モ亦相當經費ヲ投ジテ事業ニ協力セル次第ナルモ大正九年度以降ノ現地
事業ハ事實上海軍ヲ中心トシ且其指導ノ下ニ施行セラルルコトトナレリ
而シテ大正九年度ニ於テハ軍事占領後時日充分ナラズ季節ノ關係モアリテ新計畫ノ準備整ハザ
ルタメ不取敢前年北辰會ニ依リ着手シ大正九年一月以來中止セラレアリシチャイオ（バターシ